

| | | |
|---------------------------------|----------------|---------------|
| 図画工作科 5年C組 | とっておきの線 | 西原 有香莉 |
|---------------------------------|----------------|---------------|

1. 題材について

中国では、古来、絵画の価値を第一に「気韻生動」とし、作者の気や躍動が筆を通し、線となって画に投影されると考えられていた。このように「線」の表現の質は、作品の印象に大きく影響を与える。このような絵画表現の原点ともいえる「線」がもつ魅力と表現の可能性を、子どもたちの「形」や「イメージ」に関する知覚と結びつけ、それらが鋭敏に働く題材を探っていきたいと考える。

1学期、子どもたちは、毛筆用の筆による描線の活動を行った。筆を動かすスピードや力の入れ具合、手首の返し方などによって表れた、多種多様な「線」を目の当たりにしながら、自分なりの「線」を追究した。身体の動きと筆が一体となり描き出された子どもたちの描線は、勢いがあり魅力あるものであった。描き出された「線」を互いに鑑賞し、語り合うことで、他者との感じ方の違いや自己の感性の特質について気づく姿も見られた。また、「線だけなのに、なんだかかっこいい」といった感想もあり、「線」のもつ造形的な魅力やその質の多様性に気づく子どももいた。このような経験をした上で、子どもたちは本題材に取り組むこととなる。

子どもたちにとって「線を書く」という行為は、鉛筆や筆、ペンなどを使い、日常的に行うものであり、特別な活動という意識は少ないだろう。そこで本題材では、記号や文字などの意味を持つ日常的な線描活動から脱し、「線を自らつくり出す」ことを、より自覚的に行うために、とっておきの筆をつくっていくことから出発する。筆に使用する糸の質感や束ね方、穂先の長さなどによって、線の表現は多様に広がる。また、持ち手を長くするなどわざと描きづらいものにするすることで、線を描く行為自体を楽しむこともできるだろう。つくっては、どのような線が描けるのか試し、またつくって試す、ということを繰り返していく中で、子どもたちは自身がつくり出した「線」の魅力や質といった、線の造形的な世界を無意識に体験していくこととなる。

とっておきの筆を完成させた後、短い音楽のリズムや音の感じをその筆を使った線描により表す活動に移る。線は音楽別でカードに描き分け、音楽はオノマトペとしても表しておく。こうしてつくり出された多種多様な線のカードを、子どもたちで条件設定し工夫して並び替えをする。線につけられたオノマトペが、感性的な表現についての語りを可能にし、並び替えにおいて、自己や他者がつくり出した表現の“かたち”と向き合い、「線」の表現性を再確認することにもなるだろう。

以上のようにして、子どもたちが本来持つ「形」や「イメージ」に関する知覚を鋭敏に働かせることで、「線」の魅力に迫っていきたい。

2. 題材設定の理由

(1) 本実践の主張点

多様な画材や手法を取り入れた描線活動により、線のもつ創造的な力を全身で味わう体験を通して、造形的なイメージに対する鋭敏な知覚に裏打ちされた創造性が育つだろう。

本学級の子どもたちの中には、図画工作科における表現活動に苦手意識をもつ子どもがいる。その根底には、「見たものを、そっくりに描きたい。」という意識や、「絵が上手＝写実的表現が巧みである」といった、高学年に多く見られる意識があるように感じる。写実的に描くことにとらわれている子どもたちが、「線」の造形的な魅力や表現性に気づき、感性的なイメージの世界を体験していくことが、本題材の目的である。

本題材では、線をつくり出す道具（とっておきの筆）から作っていくことで、「自分だけの線」といったより強いこだわりをもつことができると考える。さらに、とっておきの筆に使用する素材や持ち手の長さなどの工夫によって、「線」の表現がさらに広がることや、線を描く際に体験する身体感覚も多種多様になることも予想される。

そして、友達（他者）がつくり出した「線」と見比べてみると、また違った「線」がつくり出されていることに気づくだろう。それは、「線」の表現は無限に広がりを見せることへの気づきとなり、それぞれの「線」がもつ“感じ”を知覚し、自分が生み出した「線」の造形的な価値を改めて実感することにもなる。さらに、「線」をオノマトペとつなげる活動を組み込んでいく。「線」を名付ける行為、つまり「線」を意味づけしていく行為は、「線」を批評的に見る活動である。言語化することで「線」をめぐる他者とのイメージの交換が可能となり、自己と他者との感じ方の違いや自己の感性の特質について、はっきりと確認することができる。「線」を媒介としたコミュニケーションに言語が加わることで、「線」のコミュニケーションツールとしての価値を実感することにもなるだろう。

様々な活動からつくり出された「線」を目の当たりにすることやその「線」の表現について語り合うことによって「線」の表現の可能性を感じるだろう。そして、その感覚は、まだ見ぬ「線」の表現への意欲や興味に繋がると考える。手の動き、目での認識、言葉での意味付けによる「線」の感覚的世界の体験を重ねることで、「線」の認識が深まると共に、「とっておきの線」を目指して、活動が誘発されるような学びを進めたい。

(2) 教科提案とのかかわり

自己・環境・他者がかかわりあうことによって生まれる表現

～「かかわる」から生み出される「つくり出す」喜び～

子どもたちは、形や色のもつ美しさやその組み合わせのよさに気づきながらイメージをふくらませ、何度も作り変え試行錯誤しながら納得のいく表現に近づける。ここに、図画工作科における「問い続け、学び続ける子どもたち」の姿がある。そして、この姿は「かかわる」から生み出される「つくり出す」喜びによって支えられると考える。

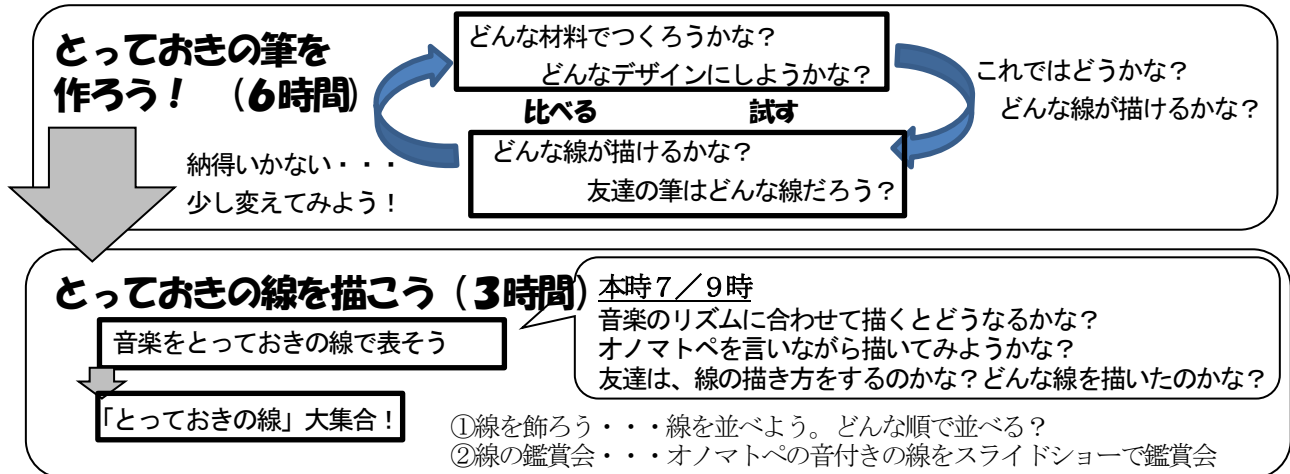
あらゆる造形活動は、自己・環境・他者のかかわりあいによって展開され、そのかかわりあいの結果が作品となって表れる。「自己」と「環境」との間の感覚や言葉による様々な相互作用の結果、形や色によって形づくられた作品が生み出されていく。この「作品」は、それを生み出すに至った学びの過程の結果であり、そこに作者である子どもたち自身が自らの学びを「対象」化することが可能になるのである。さらにこの「作品」は他者の作品と比べられ、語られ、影響を相互に与えあうことで、次元の異なる「かかわり」を生むことを可能にする。このような一連の表現的な造形活動の中で学びがより一層の深まりを見せるのである。図画工作科における造形活動は、基本的には造形活動を通して意味をつくりだす活動であり、その意味をつくりだす活動（創造活動）は、「子どもの言葉」（形や色といった造形的な表現も含む）が重層的、往還的、相互関連的に機能することで成立していく。

本題材で、子どもたちは、「線」を生み出していく過程において、「線」の魅力や質、表現性と常に対峙し、自分もつ感覚（または自己）との対話が行われることとなるだろう。そこに、他者がかかわり、自分の生み出した「線」を比べたり、ひとつの「線」についての会話を交わしたりすることで、自己の感性の特質を知ることや他者の表現のよさに気づくことができる。表現したものについて言語を媒介とする他者との対話は、形を批評的に見ることにもつながり、図画工作科における「ものの見方・考え方」の働きをさらに活性化するのである。あらゆる対話を介することで、自分が生み出した「線」の造形的な表現の価値を実感することや新たなイメージの創造につながり、子どもたちは、表したい「線」を追い求め、また試したり、比べたりしながら活動し始めることを予想する。それは、まさに「問い続け、学び続ける子どもたち」の姿であると共に、図画工作科における「めざす力」「つなぐ力」「実感する力」が磨かれ始める瞬間であると考えられる。

3. 題材目標

| めざす力 (学びに向かう力・人間性) | つなぐ力 (思考力・判断力・表現力) | 実感する力 (知識・技能) |
|--|---|--|
| 「線」の魅力や質、表現性を感じながら、積極的にコミュニケーションをとろうとする。 | 「線」の創造的な力を音や言葉の世界との往還の中でイメージを広げ、「線」の感性的な見方や考え方を深める。 | 「線」の質や表現性を体験的に理解するとともに、材料や用具、技法を活用することで「線」を表すことができる。 |

4. 題材計画 (全9時間 本時7/9)



5. 本時について

本時は、とっておきの筆を使って、聴いた音楽を「線」で表現する場面である。自分のつくった道具でどのような線を生み出すことができるのか試したり、友達の表現や活動と比べたりすることで、「線」の質について感覚的に体験してきた子どもたちが、感性的な世界にある「線」の魅力や質や表現性を、オノマトペを使うことで言葉とつなげ価値つけていく。オノマトペで表すことにより、他者とのイメージの交換が可能となり、感性の違いが明確になることで自己の表現の価値に気づく場面でもありと考える。その結果、自己の働きかけによってつくり出された「線」の質とより深く向き合うこととなり、それは、自己や「線」との対話が行われることでもある。そこには、記号や文字以前の意味をなさない「線」の表現があり、子どもたちは、「線」を感性的に認識していくこととなる。その過程こそが、本時における学びの深まりと考える。